

潮見實先生をしのんで

星

明

潮見實先生は、昭和五十四年九月五日午前六時三十二分、安らかな眠りにつかれ、天に帰られました。

先生は、昨年六月上旬お住いを京都の北野から東京の世田谷へ移され、七月二十五日、東京慈恵会医科大学附属病院にご入院され、ご病氣のご療養中でした。東京へ移られるほんの数日前、大学にお見えになられ、九月には集中講義に参りますからと言われ、大学院生に課題を出されていかれたのです。その僅か三カ月後に、ご逝去されるとは、まさに人の世のはかなさを思い知らされました。

潮見先生は、明治三十四年四月七日、東京市神田区にお生れになり、昭和二年東京帝国大学文学部社会学科をご卒業され、文部省、日本学術振興会、労働科学研究所を経て、昭和二十年四月、先生四十四歳の時、ご先祖の眠られる山口県に疎開されました。先生が労研の要職を辞されてまで山口へ行かれたご理由は、戸田貞三先生の戦争についてのおことばの

中に、潮見先生ご自身で自らの将来をプレ・ポワールされたこと、ご令嬢と学友が下校途中空襲にあわれその学友が亡くなられたことにショックを受けられたこととお聞きしております。山口では、村役場の書記になられましたが間もなく退職されました。帝大を出て、文部省勤務のご経験もある先生を村長はどのように処遇しようかと思案されたとか。その後、農業にご専念するべく本だけを頼りに田畑の耕作に精出されました。薩摩芋の葉ばかり繁って、肝心の芋ができなかつた、という失敗談もお聞きしました。しかし、昭和二十六年三月、山口大学助教授にご就任、三十九年教授になられ、四十年定年にてご退官になられた。同年桃山学院大学教授にご就任、四十六年四月には佛教大学教授になられました。以来五十四年三月まで八年間、佛教大学で研究と教育にご専念せられ人材の育成にご尽力されました。

また先生には、昭和五十年七月、佛教大学社会学研究会設

立以来五十三年三月まで、初代委員長としてご活躍いただきました。発足当初二四名の会員が現在では一〇〇名を越え、『佛大社会学』の第五号が発行されるまでに生長することができましたのも、ひとえに先生のお力添えの賜もものと有難く感謝いたしております次第です。先生は『佛大社会学』（創刊号）の「発刊の辞」をお書きになり、その中で「斯学の学究が段々と着目するようなものに生長することを願ってやまない」と申されました。お蔭様で二、三の掲載論文が引用されたり、紹介されたりするまでになりました。まだまだこれからですが、先生は「必ずやこの赤子が立派に生長するものと信じて疑わない」とも言ってくださいました。先生のご恩に報いるために、また先生に喜んでいただけるように、今一層の努力を先生の御霊に誓います。

晩年、先生は学部一回生相手のご講義中ある英語の社会学書の中の“boy sees girl—boy whistles—girl smiles and stops—conversation—friendship—courtship—marriage—children”という文章を「男の子が女の子を見る——その男の子が（女の子の注意をひこうとして）口ぶえをふく——女の子がニコリ笑って立ちどまる——会話（が始まる）——友情関係（に進む）——（友人関係）だけではおさまらず、恋愛関係に発展し）婚約関係（を結ぶ）——結婚——大勢の子供（を生む）」と訳されました。翻訳家顔負けの名訳ではありませんか。欧米と日本との文化の違いはあ

りましようが、身近な、日常のできごとから、社会学の基本となる社会的行為、社会的相互作用、社会関係、社会集団、社会制度、社会過程といった諸概念ができてきていることを見事に見抜かれた先生にしておできになる訳文でありました。

老練な社会学者、無欲恬淡としたお人柄の「洗耳亭御主人」になられた先生からわれわれはもっともとお教えをいただくことになりました。しかし、今はもうそれもかなわぬことになりました。愛妻家で子煩悩であられた先生、雷が大嫌いだっただ先生、昭和五十二年三月三日の大学院修了コンパで「餅あげて娘喜こぶ雛祭り股の辺りに零す〇〇」と詠まれた先生、シャッポウのお似合いのお洒落だった先生、健康のためだと言われタバコの銘柄をチェリーからジャストへ替えられた先生、東京へ帰ったら一高や東大の同窓生と逢ったり、疎外の問題をやるよと言われた先生、アメリカにおられるお嬢さんやお孫さんのミアちゃんにお逢いされることをお楽しみにされていた先生、このような先生のすべては、われわれの心の中にこれからもずっと生きつづけることでしょう。先生、どうか、これからも私たちを天の上からお見守りください。

潮見實先生の御年、七十八歳。昭和五十四年九月五日に御逝去されし。潮見實大命の祈御霊安かれ。

（ほし あきら 社会学部講師）